



【表紙写真】

縁結びにご利益があるといわれる川越氷川神社では、奉納された江戸風鈴1,500個が「縁結び風鈴」として境内を彩っています(9月4日(日)まで)。人と人をつなぐ風鈴の音色に耳を澄ませ、しばし涼を感じてみてはいかがでしょうか。
川越氷川神社(埼玉県川越市宮下町2-11-3)

表紙になるかも？

あなたの写真で全国に温もりを届けてみませんか

『小さな親切』誌では、下記のテーマの写真を募集。お写真は本誌やWebサイトに掲載するほか表紙に使用させていただく場合があります。採用された方には、粗品をプレゼントいたします！

- 親切な風景
- あなたの街の素敵な風景
- あなたのほっとする場所

＜申込方法＞

- お写真は紙焼きではなく、下記の方法でデータでお送りください。

【メール添付】 skm1963@kindness.jp

【DVDなどを郵送】

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-20-4
公益社団法人「小さな親切」運動本部 写真募集係

＜注意事項など＞

- 写真のサイズ：(スマホの場合) 800KB以上
(デジタルカメラの場合) 3,456 × 2,304ピクセル以上
- 人物がうつっている場合は、肖像権の侵害がないようご配慮ください。
- 他のコンテストなどへの応募作品はご遠慮ください。

「小さな親切」誌は、季刊発行

春号・5月、夏号・8月、秋号・11月、新春号・1月の予定です

2022年8月1日発行 通巻527号

編集・発行人 鈴木恒夫

発行所 公益社団法人「小さな親切」運動本部
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-20-4
TEL.03-3263-2866 FAX.03-3263-3838
https://www.kindness.jp/

印刷所 広研印刷株式会社
©無断転載禁止 落丁、乱丁はおとりかえいたします。



恒さんが行く！

「沖」 縄」は今年また、特別の年を春と夏の初めに迎えた。5月15日が本土復帰から50年。6月23日は、沖縄全戦没者追悼の77年目の式典。ご縁の濃淡はあっても、何らかの形で「沖縄」のことが胸の内から離れずにいる方々は、いっそう深い思いにかられたことだろう。

かく言う私は、他人様よりはるかに格別の思いを「沖縄」には抱いている。本土復帰の3、4年ほど前、私は米軍統治下の那覇に、毎日新聞の特派員として駐在、沖縄現地からの報道に日夜明け暮れていたからだ。

太平洋戦争が始まった昭和16(1941)年に生を受けた私は、横浜上空に飛来したB29爆撃機が真っ赤な火を噴く焼夷弾を落とすのを、防空壕に逃げ込む祖母の背中であらゆる見た記憶がある。終戦から2年後の昭和22(1947)年4月には、生家が放火泥棒に火をつけられて全焼。また、父が陸軍に召集されたまま生死不明だった自分の弟の戦死の知らせに号泣し、裏山から泰山木の幼木をリアカーに乗せ、靖国神社の森に上に行く姿などなど……。

「よ」 し、オレは戦争を絶対にさせないため、新聞記者に必ずなる」。

その思い通り、私は毎日新聞社に合格。入社5年余りの若造が那覇に派遣されたのだった。戦争への人一倍強い拒否感が、米軍統治下の沖縄の本土復帰への悲願を伝える原点だったのかもしれない。

那覇では、地元紙・琉球新報の本社に毎日新聞支局があり、支局長が所轄の西部本社から派遣されていたが、同じように政治部記者だった筑紫哲也氏が沖縄タイムス社内の朝日新聞支局にすでに派遣されており、私は良きライバル、良き友として彼とは長い付き合いを重ねてきた。

「那」 覇駐在中は、ベトナム戦争の爆撃に嘉手納基地から飛び立つB52戦闘機の姿、米軍兵士の犯罪、日を追って広がりを見せる本土復帰運動など、取材に没頭する日々。私の胸の内に広がっていったのは、琉球処分や米軍の進駐などの過酷な沖縄の歴史の中でも、決して卑劣な行動に走らない「ウチナンチュウ(沖縄人)」の優しい心情への尊敬の思いだった。

「沖縄には自分を守るための武器はあるが、人を責める武器は歴史上なにひとつないんだ」と教えてくださった方は、どなただったか。

改めて私たち「ヤマトンチュウ」は、本年の歴史的な日を境に、戦争で県民4人に一人の命が奪われ、今なお在日米軍基地の70%余りを抱え込まされている沖縄へのご恩返しを……。

本土復帰50年目の5月15日付、毎日新聞の記事。

(主筆・前田浩智記者)

「東大で学んだ茅誠司氏は沖縄訪問を機にしょく罪意識を強め、(中略)その心の状態を『沖縄病』と名付け、『沖縄病第一号』を自ら名乗ったという。」

私たち「小さな親切」運動の創始者である茅学長の心を、改めてかみしめることのできる一文だ。

私にとって沖縄は……

代表 鈴木恒夫